



聖大金曜日

晚 課

2016 OSAKA

晩 課 聖大金曜日

輔祭 ^{きみ} 君よ、^{しゆくさん} 祝讚 せよ。

司祭 ^{ちち} 父と^こ子と^{せいしん}聖神の^{くに}國は^{あが}崇め^ほ讃めらる、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に。

(詠) 「アミン」。

誦經、^{われら}我等の^{かみ}神よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す。

^{てん}天の^{おう}王、^{なぐさ}慰むる^{もの}者よ、^{しんじつ}眞實の^{しん}神、^あ在らざる^{ところ}所なき^{もの}者、^み満たざる^{ところ}所なき^{もの}者よ、^{ばんぜん}萬善の^{ほうぞう}寶藏な

^{もの}る者、^{せいめい}生命を^{たま}賜ふ^{しゅ}主よ、^{きた}來りて^{われら}我等の中に^{うち}居り、^お我等を^{われら}諸の^{もろもろ}穢より^{けがれ}潔く^{いざぎよ}くせよ、^{しぜんしゃ}至善者よ、

^{われら}我等の^{たましい}靈を^{すく}救ひ^{たま}給へ。

^{せい}聖なる^{かみ}神、^{せい}聖なる^{ゆうき}勇毅、^{せい}聖なる^{じょうせい}常生の^{もの}者よ、^{われら}我等を^{あわれ}憐めよ。三次

^{こうえい}光榮は^{ちち}父と^こ子と^{せいしん}聖神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、「アミン」。

^{しせい}至聖^{さんしゃ}三者よ、^{われら}我等を^{あわれ}憐め、^{しゅ}主よ、^{われら}我等の^{つみ}罪を^{いざぎよ}潔く^{しゅさい}くせよ、^{われら}主宰よ、^{あやまち}我等の^{ゆる}愆を^{せい}赦せ、^{せい}聖な

^{もの}る者よ、^{のぞ}臨みて^{われら}我等の^{やまい}病を^{いや}癒し^{たま}給へ、^{ことごと}悉く^{なんじ}爾の^な名に^よ因る。

^{しゅあわれ}主 憐めよ。三次

^{こうえい}光榮は^{ちち}父と^こ子と^{せいしん}聖神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、「アミン」。

^{てん}天に^{いま}在す^{われら}我等の^{ちち}父よ、^{ねが}願はくは^{なんじ}爾の^な名は^{せい}聖と^{なんじ}せられ、^{くに}爾の^{きた}國は^{なんじ}來り、^{むね}爾の^{てん}旨は^{おこな}天に行は

^{ごと}るが^ち如く^{おこな}地にも^わ行はれん、^{にちよう}我が^{かて}日用の^{こん}糧を^{われら}今日^{あた}我等に^{たま}與へ^{われら}給へ、^{おいめ}我等に^{もの}債ある^{われら}者を^{われら}我等

^{ゆる}免すが^{ごと}如く、^{われら}我等の^{おいめ}債を^{ゆる}免し^{たま}給へ、^{われら}我等を^{いざない}誘に^{みちび}導かず、^{なお}猶我等を^{きょうあく}凶悪より^{すく}救ひ^{たま}給へ。

司祭 ^{けだしくに}蓋^{けん}國と^{こうえい}權能と^{なんじちち}光榮は^こ爾^{せいしん}父と^き子と^{せいしん}聖神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に。

誦經 「アミン」。

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

きた われら おう かみ こうはい
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら かみ こうはい ふふく
來れ、ハリストス我等の・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはい ふふく
來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

首誦聖詠

わ たましい しゅ ほ あ しゅ わ かみ なんじ いた おおい なんじ こうえい いげん こうむ
我が 靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴とを被

なんじ ひかり ころも ごと き てん まく ごと は みず うえ なんじ みや た くも なんじ
れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾の

くるま な かぜ つばさ ゆ なんじ かぜ もつ なんじ ししゃ な ほのお もつ なんじ えきしゃ な
車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焰を以て爾の役者と爲す。

なんじ ち かた もとい た こ よよ うご なんじ ふち もつ いふく ごと これ おお
爾は地を固き基に建てたり、此れ世世に動かざらん。爾は淵を以て衣服の如くに之を覆へ

やま いただき みず た なんじ おどし よ こ はし なんじ いかづち こえ よ すみやか さ
り、山の巔に水立つ。爾の恐嚇に依りて此れは奔り、爾の雷の聲に由りて速に去る。

やま のぼ たに くだ なんじ こ ため さだ ところ いた なんじさかい た これ こ
山に升り、澗に降り、爾の此れが爲に定めし處に至る。爾界を立てて之を踰えざらしむ、

かえ ち おお なんじ いずみ たに つかわ やま あいだ みず なが の もるもる けもの の
反りて地を覆わざらん。爾は泉を澗に遣せり、山の間には水は流れ、野の諸の獸に飲ま

の うさぎうま そのかわき とど そら とり そのかたわら す えだ あいだ こえ いだ なんじ うえ
しむ、野の驢は其渴を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上な

みや やま うるお ち なんじ わざ み あ た なんじ くさ けもの ため しょう
る宮より山を潤し、地は爾の造工の果にて鑿き足れり。爾は草を獸の爲に生ぜしめ、

やさい ひと もとめ ため しょう ち しょくもつ いだ さけ ひと こころ たのし あぶら
野菜を人の需の爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂ませ、膏は

その おもて うるお パン ひと こころ やしな しゅ き そのう はくこうぼく あ た
其の面を澤し、餅は人の心を養ふ。主の樹、其植えたるリワンの栢香木は鑿き足れり、

とり そのうえ す つく まつ つる すみか たか やま しか ため いわお うさぎ ため かくれが しゅ
鳥は其上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は兎の爲に避所たり。主は

つき つく とき さだ ひ そのい ところ し なんじくらやみ し すなわちよ そのときはやし けもの
月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾暗を布けば、則夜あり、其時林の獸

みない めぐ しし えもの ため ほ そのしよく かみ こ ひ い かわら あつま おのれ あな
皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に

ふす ひと その わざ ため い はたら くれ いた しゅ なんじ しわざ なん おお みな ちえ もつ
伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以

つく ち なんじ どうぶつ み か おおい ひろ うみ かしこ むすう どうぶつ だいしょう
て作り、地は爾の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、彼處には無数の動物、大小

いきもの かしこ ふねかよ かしこ か たいぎよ なんじつく そのうち あそ かわら みな
の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中に遊ばしむ。彼等は皆

なんじ とき したが しよく あた ま これ あた う なんじ て ひら たまもの あ
爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば賜に饜かせら

なんじ かんぼせ かく おそ まど そのき と あ し ちり かわ なんじ き ほどこ つく
る、爾の顔を隠せば惶れ惑ひ、其氣を取り上ぐれば死して塵に歸る。爾の氣を施せば造

なんじ またち おもて あらた ねが こうえい よよ しゅ あ ねが しゅ おのれ わざ
られ、爾は又地の面を新にす。願はくは光榮は世世に主に在らん、願はくは主は己の造工

ため たのし かわち み ちふる やま ふ けむりた われい うちしゅ うた よ
の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主に歌ひ、世

おわ わ かみ うた ねが わ うた かわ よろこ われしゅ ため たのし ねが
を終るまで我が神に歌わん。願はくは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願はく

ざいにんら ち き ふほう もん そん わ たましい しゅ ほ あ
は罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈よ、主を讃め揚げよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」 「ア ril イヤ」 「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連禱】〈通常のメロディ〉

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐めよ
輔祭 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、
輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、
輔祭 此の聖堂、及び信と愼と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、
輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、
悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、
輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん。
輔祭 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、
輔祭 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、
輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、艱難に遭ふ者、虜となりし者、及び彼等の救の
爲に主に禱らん、
輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 ^{けだし}蓋 凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神^おに帰す、今も何時も世世に、(詠) 「アミン」

(詠) [主よ汝に呼ぶのスティヒラ] 第140聖詠 (1調で)

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や
われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに
いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは
香^か炉^ろのかおりのごとく 汝が^かん^ばせのまえにのぼ^り
わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん 主や
われにききたま え

(続けて)

誦經 ^{しゅ}主よ、我が口に衛^わを置き、我が唇^{くち}の門を扞^まぎ給へ、我が心^こに邪^{よこ}なる言^{こと}に傾^{かた}き

て、不法^{ふほう}を行^おふ人と共に罪^なの推^つ諉^みせしむる母^いれ。<中略>

わ ^こえ ^もつ ^{しゅ}よ わ ^こえ ^もつ ^{しゅ}いの わ ^いのり ^{その}まえ ^そそ わ ^うれい ^{その}まえ ^{あら}わ
我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯

せり。我が^わ靈^{たましい} 我の衷に弱りし時、爾^{なんじ}は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に

我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、

我が靈^{たましい}を顧^{かえり}る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾^{なんじ}は我の避所なり、生ける者の地

に於て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救ひ

給へ、彼等は我より強ければなり。

第一調

句 主よ、若し爾^{なんじ}不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾

の前に敬まん爲なり。

ハリストスよ、悉くの造物は爾が十字架に懸れるを覩て、畏懼に因りて變ぜり、日は晦み、

地の基は震へり、萬物を造りし者と偕に萬物は苦しめり、甘んじて我等の爲に忍びし主よ、

光榮は爾に歸す。

句 我が靈^{たましい}主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。願はくはイズラ

イリは主を恃まん。 第二調

不虔不法の民よ、何爲れぞ徒に謀る、何爲れぞ萬有の生命を死に定めたる、大なる哉奇蹟、

世界の造成主は不法者の手に付され、人を愛する者は木の上に擧げらる、地獄に擄にせら

れて、寛忍なる主よ、光榮は爾に歸すと籲ぶ者を釋かん爲なり。

句 蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリほ其悉くの不法より贖

はん。

言よ、無玷なる童貞女は今日爾が十字架に擧げらるるを覩て、母の情を以て泣き、大に

心を傷め、靈の深處より痛く歎き、膺を拊ちて憂ひて呼べり、哀しい哉神聖なる子や、哀

しい哉世界の光や、神の羔よ、何ぞ我が目より隠れたる、故に無形の軍は慄きて曰へり、
測り難き主よ、光榮は爾に歸す。

句 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

ハリストスよ、種なく爾を生みし者は爾萬物の造成主及び神が木に懸れるを覩て、悲しく
呼べり、吾が子よ、爾が姿容の美しきは何に隠れたる、我爾が不義に、十字架に釘せら
るるを見るに忍びず、速に起きよ、我も爾が死よりの三日目の復活を覩ん爲なり。

句 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。 第六調

今日造物の主宰はピラトの前に立ち、萬有の造成主は十字架に付され、甘んじて羔の如く
牽かれて、釘を以て釘せられ、脅を刺さる、「マンナ」を雨らしし者は海絨を以て飲ませ
られ、世界を拯ふ者は頬を批たれ萬物の造成主は己の諸僕より嘲けらる、嗚呼主宰の仁愛
や、釘する者の爲に己の父に祈りて曰ふ、父よ、彼等に此の罪を免せ、蓋不法の者は如何
なる不義を行へるを知らず。

光榮は父と子と聖神に歸す。

嗚呼不法の會は何如に諸恩に恥ぢずして造物の王を死に定めたる、主は諸恩を記憶せしめて
彼等に謂へり、我が民よ、我何をか爾等に爲しし、我奇蹟を以てイウデヤを満てしにあら
ずや、一言を以て死者を復活せしめしにあらざや、諸病諸疾を醫ししにあらざや、爾等何を
以て我に報いたる、何ぞ我を記憶せざる、醫治に代へて我に傷を加へ、生命に代へて我を死
し、我恩者たる者を悪者の如く、立法者たる者を不法者の如く、萬有の王たる者を定罪せら
れし者の如く木に懸けたり。寛忍の主よ、光榮は爾に歸す。

今も何時も世世に、「アミン」

[生神女讃詞] 6調 今日畏るべき至栄なる秘密の行はるるを見る。触れがたき者はとどめられ、アダムを詛より釈きし者は縛られ、心腹を試みる者は非義に試みられ、淵を閉じたる者は獄に閉じられ、天軍の戦きて前に立つ所の者はピラトの前に立ち、造物主は造物の手にて批たれ、生死者を審判する者は審判せられて木に定められ、地獄を破る者は墓に封ぜらる、慈憐を以て一切を忍びて、衆人を詛より救ひし寛容の主よ、光栄は爾に帰す。

、いまも いつも 世 世 に アミン

今日畏るべき至栄なる秘密の 行わるるを 見 る

触れ難き者はとどめら—れ、アダムを呪いより釈きし者は

しばら れ 心腹を試みる者は非義に 試み られ

淵を閉じたる者は 獄に閉じられ、 天軍の戦きて

前に立つ所のものは ピラトの前に 立ち、

造物主は造物の手にて 批た れ 生死者を審判する者は

審判せられて 木に定められ、 地獄を壊る者は

墓に 封ぜら—る 慈憐を以て一切を しのびて、

衆人を詛より救ひし寛容の主よ、光栄は なんじに 帰す。

[聖入]

司祭 睿智、謹みて立て。

(詠) 聖にして福たる常生なる、天の父の聖なる光栄の穩なる光イイスス・ハリストスよ、我等日の入に至り、晩の光を見て、神父と子と聖神[°]を歌ふ。生命を賜ふ神の子よ、爾は何時も敬虔の声にて歌はるべし、故に世界は爾を崇め讚む。

聖にして 福^くたーる

常生なる 天の父の 聖なる 光 栄 の

おだ 穩やかなる ひかり イイススハリストス や、

われら 日の入りに いたり 晩^{くれ}の ひかりを 見て、

か み ち ち せい しん 神 父 と 子 と 聖 神 を う た ー う

い の ち た ま 命 を 賜 う 神 の 子 や、

なんじは いつも 敬 虔 の 声 に て 歌 わ る べ し

ゆ え せ か い 故 に 世 界 は なんじ あ が 爾 を 崇 め ほ 讚 む

輔祭 謹みて聴くべし。

司祭 衆人に平安。

輔祭 睿智、謹みて聴^きくべし。

誦經 【ポロキメン】 第21聖詠、第4調、

共に我が外衣を分ち、我が裏衣をくじせり。

(句) 我が神よ、我が神よ、我に聴き給へ、何ぞ我を遣てたる。



【エジプトを出づる記の読み】19章10-19

主はモイセイと面^{おもて}を合せて語りしこと、人^{ひと}がその友^{とも}と語れる如し、後^ご彼^{のち}彼^{かれ}釋^{ゆる}されて營^{えい}に返り、
 其^{その}侍者^{じしや}、ナワインの子^こイイスス、少^{わか}き者^{もの}は幕^{まく}を離^{はな}れざりき。モイセイ主^{しゅ}に謂^いへり、視^みよ、爾^{なんじ}
 我^{われ}に謂^いふ、斯^この民^{たみ}を導^{みちび}き上^{のぼ}れ、然^{しか}るに誰^{たれ}をか我^{われ}と偕^{とも}に遣^{つか}さん^{いま}を未^{われ}だ我^{しめ}に示^{なんじ}さざりき。爾^{なんじ}嘗^{かつ}
 て我^{われ}に謂^いへり、我^{われ}衆^{しゆう}よりも爾^{なんじ}を識^しる、爾^{なんじ}我^{われ}の前^{まえ}に恩^{めぐみ}を獲^えたりと、若^もし爾^{なんじ}の前^{まえ}に恩^{めぐみ}を獲^え
 たらば、求^{もと}む、己^{おのれ}を我^{われ}に示^{しめ}せ、我^わが明^{あきら}かに爾^{なんじ}を見^みん爲^{ため}、爾^{なんじ}の前^{まえ}に恩^{めぐみ}を獲^えたる者^{もの}として在^あ
 らん爲^{ため}、亦^{また}此^この大^{おおい}なる族^{ぞく}の爾^{なんじ}の民^{たみ}なるを知らん爲^{ため}なり。主^{しゅ}彼^{かれ}に謂^いへり、我^{われ}親^{みづか}ら爾^{なんじ}の前^{まえ}に
 往^ゆき、爾^{なんじ}を平安^{へいあん}ならしめん。モイセイ彼^{かれ}に謂^いへり、爾^{なんじ}若^もし親^{みづか}ら我^{われ}等^らと偕^{とも}に往^ゆかずば、我^{われ}等^ら
 を此^こより出^いす母^{なか}れ。我^{われ}及^{およ}び爾^{なんじ}の民^{たみ}が爾^{なんじ}の恩^{めぐみ}を獲^えたることは、如何^{いか}にして誠^{まこと}に知^しるを得^うべ
 きか、爾^{なんじ}が我^{われ}等^らと偕^{とも}に往^ゆくを以^{もつ}てするに非^{あら}ずや、然^{しか}らば我^{われ}及^{およ}び爾^{なんじ}の民^{たみ}は凡^{おほ}そ地^ちに在^ある諸^{しよ}民^{みん}
 に超^こえて光^{こう}榮^{えい}を獲^えん。主^{しゅ}はモイセイに謂^いへり、爾^{なんじ}が言^いひし此^この事^{こと}をも、我^{われ}行^{おこな}はん、蓋^{けだし}爾^{なんじ}
 は我^{われ}の前^{まえ}に恩^{めぐみ}を獲^えたり、我^{われ}衆^{しゆう}よりも爾^{なんじ}を識^しる。モイセイ曰^いへり、求^{もと}む、爾^{なんじ}の光^{こう}榮^{えい}を我^{われ}に
 示^{しめ}せ。主^{しゅ}曰^いへり、我^{われ}我^{われ}が光^{こう}榮^{えい}を爾^{なんじ}の前^{まえ}に過^すぎしめ、主^{しゅ}の名^なを爾^{なんじ}の前^{まえ}に宣^のべん。我^{われ}恵^{めぐ}まん
 とする者^{もの}を恵^{めぐ}み、憐^{あわれ}まんとする者^{もの}を憐^{あわれ}む。又^{また}曰^いへり、爾^{なんじ}は我^{われ}が面^{おもて}を觀^みること能^{あた}はず、蓋^{けだし}人^{ひと}
 我^{われ}が面^{おもて}を觀^みて、猶^な生^なくるを得^うず。主^{しゅ}曰^いへり、視^みよ、我^{われ}に此^この所^{ところ}あり、爾^{なんじ}此^この磐^{いわ}の上^{うへ}に立^たて、
 我^{われ}が光^{こう}榮^{えい}の過^すぐる時^{とき}、我^{われ}爾^{なんじ}を磐^{いわ}の穴^{あな}に置^おき、我^{われ}が過^すぎ去^さるまで、手^てを以^{もつ}て爾^{なんじ}を蔽^{おほ}はん、我^{われ}
 手^てを除^{のぞ}く時^{とき}は、爾^{なんじ}我^{われ}が背^{うしろ}を視^みん、我^{われ}が面^{おもて}は爾^{なんじ}に現^{あら}れざらん。

輔祭 謹みて聽くべし。

司祭 衆人に平安。

輔祭 睿智、^き謹みて聴くべし。

誦經 【ポロキメン】第34聖詠、第4調、

主よ、我と争ふ者と争ひ、我と戦ふ者と戦ひ給へ。（句）、盾と甲とを執り、起ちて我を助け給へ。

ポロキメン 2 <4調>



主よ、われと争う者と争そい、 我とたたかうものと
たたか
戦いたまえ。

輔祭、睿智。

誦經 イオフ書の讀。 四十二章十二至十七節

輔祭 謹みて聴くべし。

主はイオフの終^{しゆ}を祝福^{おわり}せしこと、其始^{しゆくふく}に過ぎたり、彼の^{そのはじめ}家蓄^すは綿羊^{かれ}一萬四千^{かちく}、駱駝^{ひつじ}六千^{いちまんよんせん}、

牛^{らくだ}一^{ろくせん}千^{せん}耦^ご、牝^{うしいっせんぐう}驢^{めろぼ}馬^{いっせん}一^な千^なありき。彼に^{かれ}男子^{なんし}七^{しちにん}人^{さん}、女子^{さん}三^{さん}人^{にん}生^{うま}れたり。彼は^{かれ}第一^{だい}女^{いち}を^{じよ}晝^{ひる}と^な名^なづけ、

第二^{だいに}を^なカ^{だい}ッ^{さん}シ^つヤ^なと^な名^なづけ、第三^{だい}を^なア^{てん}マ^{うち}ル^{おんな}フ^{ごと}エ^ごヤ^ごの^ご角^{かく}と^{かく}名^なづけたり。天下^{てんか}の中^{うち}イオフ^{おんな}の^{ごと}女^ごの^{ごと}如^{ごと}

く^{うるわ}美^{ちち}し^{かれら}きは^{その}あ^{きょう}ら^{だい}ざ^{あい}り^だき、父^あは^{さん}彼^{さん}等^{ぎょう}に^あ其^{あた}の^や兄^{まい}弟^{のち}の^{のち}間^{のち}に^{のち}産^{のち}業^{のち}を^{のち}與^{のち}へたり。イオフ^{のち}病^{のち}の^{のち}後^{のち}

一^{いっ}百^{ひゃく}四^し十^{じゅう}年^{ねん}生^{せい}存^{ぞん}せり、其^{その}年^{とし}總^{すべ}て^に二^に百^{ひゃく}四^し十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}なりき、彼は^{かれ}其^{その}子^こ、其^{その}子^この^こ子^こを^み見^みて、四^よ代^{だい}に^お及^お

べり。斯^かく^かイオフ^かは^か年^{とし}老^らひ^ら日^ひ満^みち^して^し死^ししたり。

輔祭 睿智。

誦經 イサイヤの預言書の讀。 五十二章十三節至五十四章一節

輔祭 謹みて聴くべし。

誦經、主^{しゆ}是^かく^かの^か如^{ごと}く^い言^みふ、視^{われ}よ、我^{ぼく}の^よ僕^{すす}は^の善^あく^あ進^はみ^は、升^のり^あ、舉^はり^あて^は、甚^は高^はく^はな^はら^ならん。多^おく

の^{もの}者^{なんじ}が^み爾^みを^{おどろ}見^{ごと}て^{ごと}驚^けきた^ける^だ如^{その}く、（蓋^そ其^な面^なは^な損^おは^れし^こと、凡^お人^よに^こ逾^そへ^ひ、其^そ容^かは^た損^そは

れ^ひし^と、人^{ひと}の^{しよ}諸^こ子^こに^か逾^{ごと}へ^かたり、）是^かく^の如^{ごと}く^{かれ}彼^おは^た多^たく^みの^お民^おを^お驚^たか^みさん、諸^{しよ}王^{おう}は^{かれ}彼^まの^え前^{その}に^{その}其^{その}

口^{くち}を^{つぐ}緘^けまん、蓋^け彼^{かれ}等^らは^{いま}未^{かつ}だ^{かれ}曾^いて^い彼^い等^らに^い言^{こと}は^みれ^きざ^きり^きし^{こと}事^しを^し見^し、聞^きか^しざ^しり^し事^しを^し知^しらん。主^{しゆ}よ、

たれ われら き こと しん しゅ ひじ たれ あらわ けだしかれ そのまえ い
誰か我等より聞きし事を信じたる、主の臂は誰にか顯れたる。蓋彼は其前に出でしこと、

めばえ ごと かわ ち ほつ ね ごと かれ うち すがた いげん われら かれ
萌芽の如く燥きたる地より發する根の如し、彼の中には姿容もなく、威嚴もなし、我等彼を

み そのうち われら した うるわ かたち かれ ひとびと あなど うれい ひと
見しに、其中に我等を慕はしむる美しき貌なかりき。彼は人人に藐とられ、憂愁の人に

して、くるしみ なら われら おもて かれ さ くれかる われら くれ とうと
して、苦に習へり、我等面を彼より避けたり、彼輕んぜられて、我等彼を尊ばざりき。

しか かれ われら つつが にな われら やまい お われら おも くれ かみ う
然れども彼は我等の恙を任ひ、我等の病を負ひたり、我等意へらく、彼は神より撻たれ、

ぼつ ひく しか くれ われら つみ ため きず われら ふほう ため
罰せられ、卑くせられたりと。然れども彼は我等の罪の爲に傷つけられ、我等の不法の爲に

くる そのみ う ぼつ よ われら へいあん え そのきず よ われら いや われら
苦しめられたり、其身に受けし罰に因りて我等平安を獲、其傷に因りて我等醫されたり。我等

みなひつじ ごと まよ おのおてん そのみち ゆ しゅ われら しゅうじん つみ くれ にな くれ
皆羊の如く迷ひ、各轉じて其途に往けり、主は我等衆人の罪を彼に任はしめたり。彼は

くる あま くるしみ う その くち ひら くれ ひつじ ごと ほふ
苦しめられたれども、甘んじて苦を受けて、其の口を啓かざりき、彼は羊の如く屠られ

ん ため ひ こひつじ そのけ き もの まえ あ こえ ごと くれ か ごと そのくち
ん爲に牽かれたり、羔が其毛を翦る者の前に在りて聲なきが如く、彼は此くの若く其口を

ひら そのいやしき お とき くれ お さいばん おこな しか そのらいれき たれ よ これ と
啓かず、其卑賤に居る時、彼に於ける裁判は行はれたり、然れども其來歴は孰か能く之を解

かん、 けだしかれ いのち ち と わ たみ ざいあく ため くれけい う そのほか ほんざいしゃ とも
かん、蓋彼の生命は地より取らる、我が民の罪惡の爲に彼刑を受けたり。其墓は犯罪者と偕

もう くれ と もの ところ ほうむ けだしかれ つみ おこな そのくち いつわり
に設けられたれども、彼は富める者の所に葬られたり、蓋彼は罪を行はず、其口には虚偽

なかりき。 くれ う しゅ むね かな しゅ くれ くるしみ わた しか くれ たましいしよくざい
なかりき。彼を撃つこと主の旨に適へり、主は彼を苦に付せり、然れども彼の靈贖罪の

まつり けん およ くれそのびょうえい えいぞく み しゅ むね くれ て よ り たつ くれ
祭を獻ずるに迫りて、彼其苗裔の永續するを見ん、主の旨は彼の手によりて利達せん。彼

おのれ たましい こうろう み まんぞく くれわ ぎ ぼく くれ し ちしき よ おお もの ぎ
は己の靈の功勞を見て満足せん、彼我が義なる僕は彼を知る知識に由りて、多くの者を義

な くれら つみ にな ゆえ くれ おお もの つ つよ もの えもの わか けだしそたましい
と爲し、彼等の罪を任はん。故に彼は多くの者を繼ぎ、強き者の獲物を分たん、蓋其靈を

し わた ほんざいしゃ とも かぞ くれ おお もの つみ にな ざいにんら ため てんたつしゃ な
死に付し、犯罪者と偕に算へられたり、彼は多くの者の罪を任ひ、罪人等の爲に轉達者と爲れ

はら い もの たの さん くる もの こえ あ よ けだしす おんな
り。妊まず、生まざる者、樂しめ、産に苦しまざる者、聲を揚げて呼べ、蓋棄てられたる婦

は、夫ある者に較ぶれば、更に多くの子あり。

輔祭 睿智。

【使徒のポロキメン】第 87 聖詠、第 6 調

我を深き坎に、闇冥に、淵に置けり。(句)、主我が救の神よ、我晝夜爾の前に呼ぶ。



【使徒の誦讀】コリンフ書 125 端、前書一章十八節至二章二節

輔祭 謹みて聴くべし。

誦經誦す、

兄弟よ、十字架の言は滅ぶる者の爲には愚なり、我等救はるる者の爲には神の能なり。蓋

録して云へるあり、我智者の智を滅し、識者の識を廢せん。智者は安にか在る、學士は安

にか在る、此の世の辯論者は安にか在る、神は此の世の智慧を愚と爲らしめしに非ずやと。

蓋世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりしに由りて、神は傳道の愚を以て、信ず

る者を救はんことを喜び。蓋イウデヤ人は休徴を乞ひ、エルリン人は智慧を覓む、然

れども我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ、此れイウデヤ人の爲には礙、エルリ

ン人の爲には愚、惟召されたる者の爲には、イウデヤ人及びエルリン人を論ぜず、ハリスト

スは神の能及び神の智慧なり。蓋神の愚は人の智慧に過ぎ、神の弱は人の強に過ぐ。兄弟

よ、爾等召されたる者の如何なる人たるを觀よ、肉に循ひて智慧ある者多からず、能あ

る者多からず、貴き者多からず。然れども神は世の愚なる者を選べり、智なる者を愧しめ

ん爲なり、神は世の弱き者を選べり、強き者を愧しめん爲なり、神は彼の賤しき者、藐ん

ぜらるる者、有るなきが如き者を選べり、有る者を廢せん爲なり、此れ凡の肉が神の前に誇

らざらん爲なり。爾等は神よりす、ハリストスイイスに在りてなり、蓋ハリストスは我等

の爲に神に由る智慧と爲り、義及び成聖と爲り、贖と爲れり、録して、誇る者は主を以て

誇るべしと、云へるが如くならん爲なり。兄弟よ、我が嘗て爾等に至りしは、爾等に言或

は智慧の勝れたるを以て、神の證を傳へん爲に至りしに非ず。蓋我爾等の中に在りて、

イイススハリストス、且其十字架に釘せられし事の外は、何をも知らざらんことを定めたり。

司祭 爾に平安。

誦經 爾の神にも。

【アリルイヤ】第一調、

神よ、我を救ひ給へ、蓋水は我が靈にまで至れり。

(句) 爾は私の心を裂き、我が疲は極れり。

(句) 願はくは彼等の目は昏みて見るを得ざらん。



マトフェイ二十七章一至三十八節、 ルカ二十三章三十九至四十三節、 マトフェイ二十七章三十九至五十四節、 イオアン十九章三十一至三十七節、 マトフェイ二十七章五十五至六十一節

彼の時司祭 諸長 と民の 長老 等皆相會して、イイススの事を議せり、之を死に致さん爲なり。

乃 之を縛りて、曳きて方伯ポンティピラトに解せり。時に彼を賣りしイウダは其定罪せら

れたるを見て、悔ひて銀三十を司祭 諸長 と長老 等とに返して曰へり、我辜なき血を付し

て、罪を犯せり。彼等曰へり、我等何ぞ與らん、自ら顧みよ。彼銀を殿に擲ちて出で、

往きて自ら縊れたり。司祭 諸長 銀を取りて曰へり、之を殿の庫に納るるは宜しからず、是れ

血の價なればなり。乃 相議して、此を以て陶人の田を買ひ、賓旅を瘞る地と爲せり。故

に其田は、今日に至るまで、血の田と稱へらる。是に於て預言者イエレミヤを以て言はれし

こと應へり、曰く、彼等銀三十、乃値を付けられし者、即イスライリの諸子が値を付けし者の價を取りて、之を陶人の田の爲に與へたり、主の我に示ししが如しと。イイスス方伯の前に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。イイスス之に謂へり、爾言ふ。司祭諸長と長老等と彼を訟へしに、一も答へざりき。時にピラト彼に謂ふ、爾に對して證すること斯く多きを爾聞かざるか。彼其一言にも答へざりき、方伯甚奇しむに至れり。節期には、方伯が民の一人の囚、其欲する所の者を釋す例ありき。其時ウラウワと名づくる著しき囚ありしが、民の集まりし時、ピラト之に謂へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する、ウラウワか、抑ハリストスと稱ふるイイススか。蓋媚嫉に因りて彼を解ししを知れり。方伯が審判座に坐せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の義人に何事をも爲す勿れ、蓋我今日夢の中に彼の爲に多く苦しめりと。然るに司祭諸長と長老とは民に唆めて、ウラウワを釋し、イイススを滅さんことを乞はしめたり。方伯彼等に問ひて曰へり、二人の中、我が誰をか爾等に釋さんことを欲する。彼等曰へり、ウラウワを。ピラト曰く、然らば我はハリストスと稱ふるイイススに何を爲さんか。皆彼に謂ふ、十字架に釘せらるべし。方伯曰へり、彼は何の悪を行ひしか。然れども彼等愈號びて曰へり、十字架に釘せらるべし。ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取り、民の前に手を盥ひて曰へり、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。民皆對へて曰へり、其血は我等及び我等の子孫に歸すべし。其時ウラウワを彼等に釋し、イイススを鞭ちて、十字架に釘せん爲に付せり。時に方伯の兵卒イイススを曳きて、公廨に入れ、全營を彼の許に集め、其衣を褫ぎて、縫き袍を衣せ、棘の冕を編みて、其首に

こうむ あし そのみぎ て も かれ まえ ひざまづ かれ たわむ い じん おう
冠らせ、葦を其右の手に持たせ、彼の前に 跪きて、彼に 戯れて曰へり、イウデヤ人の王、

よろこ またかれ つばき あし と そのこうべ う すで たわむ おわ そのうわぎ は もと
慶べよ。又彼に唾し、葦を取りて、其首を撃てり。既に 戯れ畢りて、其袍を褫ぎ、故の

ころも き じゅうじか てい ため かれ ひ ゆ い と き ひと な
衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を曳き往けり。出づる時、キリネヤの人シモンと名づく

もの あ これ し そのじゅうじか お い ところ やく されこうべ
る者に遇ひ、之を強ひて、其十字架を負はしめたり。ゴルゴファと云ふ處、譯すれば、髑髏

ところ きた す い まじ かれ の これ な の ほつ
の處に來りて、醋に膽を和へて、彼に飲ましめたるに、之を嘗めて、飲むことを欲せざりき。

かれ じゅうじか てい もの くじ と そのころも わか しこう ぎ かしこ かれ まも また
彼を十字架に釘せし者は鬮を取りて、其衣を分ち、而して坐して、彼處に彼を守れり。又

そのつみ する ふだ そのこうべ うえ お いわ こ すなわち じん おう そのとき ふたり
其罪を書せる標を其首の上に置けり、曰く、此れ乃 イイスス、イウデヤ人の王と。其時二人

ぬすびと かれ とも じゅうじか てい ひとり そのみぎ ひとり そのひだり か
の盜賊は彼と偕に十字架に釘せられたり、一人は其右、一人は其左なり。懸けられたる

はんざいしゃ いちにんかれ そし い なんじ も おのれ われら すく た いちにん
犯罪者の一人彼を誚りて曰へり、爾若しハリストスならば、己と我等とを救へ。他の一人

これ いまし い なんじあにかみ おそ けだしなんじ おな ていざい ただわれら あ
之を戒めて曰へり、爾豈神を畏れざるか、蓋爾も同じく定罪せられたり、惟我等に在り

とうぜん わ おこない かな こと う しか かれ いつ ふぜん おこな
ては當然なり、我が行に稱へる事を受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。

すなわち むか い しゅ なんじ くに きた と き われ きねん かれ い
乃 イイススに對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。イイスス彼に謂へ

われまこと なんじ つ なんじこんにちわれ とも らくえん あ す ものかれ そし こうべ うご
り、我誠に爾に語ぐ、爾今日我と偕に樂園に在らん。過ぐる者彼を誚り、首を揺かして

い でん こぼ みつか これ た もの おのれ すく も なんじかみ こ じゅうじか
曰へり。殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、己を救へ、若し爾神の子ならば、十字架より

くだ おな しさいしちょう がくし ちょうろう ら とも あぎけ い たにん すく
下れ、同じく司祭諸長も、學士、長老、ファリセイ等と偕に嘲りて曰へり、他人を救ひて、

おのれ すく あた も かれ おう いまじゅうじか くだ しか われらかれ しん
己を救ふ能はず、若し彼イズライリの王ならば、今十字架より下るべし、然らば我等彼を信

かみ たの も かみかれ よろこ いまかれ すく けだしかれ われかみ こ い
ぜん。神を恃めり、若し神彼を悦ばば、今彼を拯ふべし、蓋彼は我神の子なりと云へり。

かれ とも じゅうじか てい ぬすびと またかれ のし だいろくじ くらやみ ぜん ち おお
彼と偕に十字架に釘せられたる盜賊も亦彼を誚れり。第六時より晦冥は全地を蔽ひて、

だいくじ いた だいくじ ころおい おおごえ よ い
第九時に至れり。第九時の頃、イイスス大聲に呼びて曰へり、「イリ、イリ、ラマ、サワ

「^{すなわち}わ^{かみ}わ^{かみ}、^{なん}われ^す、何ぞ我を遣てたる。彼處に立てる者の中、或人之を聞き
て曰へり、^{かれ}彼は^よイリヤを呼ぶなり。其中の一人直に走り、^{かいじゅう}海絨を取りて、^す醋を盈たし、^{あし}葦
に束ねて、^{かれ}彼に飲ましめたり。

餘の者曰へり、^{しぼら}姑く^お舎け、^{きた}イリヤ來りて、^{かれ}彼を^{すく}救ふや^{いな}否やを觀ん。イイスス復大聲に呼び

て、^{いきた}氣絶へたり。視よ、^み殿の^{でん}幔は、^{うえ}上より^{した}下に^{いた}至るまで裂けて、^{ふたつ}二となり、^{ちふる}地震ひ、^{いわ}磐裂け、

^{はかひら}墓啓けて、^い寝ねたる^{せいじん}聖人の^み身は^{おお}多く^{ふつかつ}復活し、^{かれ}彼の^{ふつかつ}復活の後、^{のち}墓より^{はか}出でて、^い聖なる^{せい}城に入り、

^{おお}多くの^{もの}者に^{あらわ}現たり。百夫長^{ひやくふちようおよ}及び之と^{これ}偕に^{とも}イイススを^{まも}守れる^{もの}者は、^{じしん}地震と^あ有りし^{こと}事とを見て、

^{はなはだ}甚しく^{おそ}懼れて曰へり、^い此れ^こ誠に^{まこと}神の子なり。其日は^{かみ}備節日にして、^{そのひ}彼の^{そなえび}安息日は^か大なる^{スポタ}おおい

^ひ日なるに^よ因りて、^{じん}イウデヤ人は^{スポタ}安息日に^{しかばね}屍を^{じゅうじか}十字架に^{とど}留めざらん爲、^{ため}ピラトに、^{かれら}彼等の^{はぎ}脛

を^お折りて、^{しかばね}屍を^と取り^{おろ}下さんことを^こ請へり。故に^{ゆえ}兵卒來りて、^{へいそつきた}彼と^{かれ}偕に^{とも}十字架に^{じゅうじか}釘せられし^{てい}

^{だいいち}第一の^{もの}者の^{はぎ}脛を^お折り、^{だいに}第二の^{もの}者にも^{またしか}亦然せり。イイススに來りて、^{きた}其已に^{そのすで}死したるを^し見たれ^み

ば、^{かれ}彼の^{はぎ}脛を^お折らざりき、^{しか}然れども^{ひとり}一人の^{へいそつほこ}兵卒^{もつ}を以て^{その}其の^{わき}脅を^さ刺せり、^{たちまち}忽^ち血と^{みず}水と^い出で

たり。見し者は^み證^{もの}を作せり、^{しょう}其證は^な眞なり、^{そのしょう}彼は^{まこと}言ふ^か所の^い眞なるを^{ところ}知る、^{まこと}爾等をして^し

^{しん}信ぜしめん爲なり。蓋斯の^{ため}事の^{けだしこ}成りしは、^{こと}聖書の^な應ふを^{せいしょ}致す、^{かな}云く、^{いた}其骨は^{いわ}折られざらん^{そのほね}

と。聖書の^{せいしょ}他篇に^{たへん}又云ふ、^{またい}彼等は^{かれら}其^{その}刺し^さし^{もの}者を^み觀んと。彼處に^か亦多くの^{またお}婦ありて、^{おんな}遥に^{はるか}望め^{のぞ}

り、^こ是れ^{したが}ガリレヤより^{かれ}イイススに^{つか}従ひて、^{もの}彼に^{そのうち}事へたる^{もの}者なり。其中に^{マリヤ}「マダリ

ナ」、^{およ}イアコフ^{およ}及び^{およ}イオシヤの^{およ}母^{はは}マリヤ、^{また}又^こゼラエデの^{はは}子の^{ひくれ}母ありき。日暮るるに^{およ}及びて、

^とアリマフェヤの^{ひと}富める^な人、^{みずから}名は^{また}イオシフ、^{まな}自も^{もの}亦^{きた}イイススに^{かれ}學びし^{きた}者は^か來れり。彼^{ピラト}

に^つ就きて、^{しかばね}イイススの^{もと}屍を^{しかばね}求めたれば、^{あた}ピラト^{めい}屍を^{しかばね}與へんことを^{しかばね}命ぜり。イオシフ^{しかばね}屍

と これ いきぎよ ぬの つつ これ いわ うが おのれ あらた はか お おおい いし はか もん
を取りて之を 潔き布に裹み、之を磐に鑿ちたる己の新なる墓に置き、大なる石を墓の門
に轉して去れり。マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと彼處に在りて、墓に對ひて坐せり。

詠隊 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

【重連禱】

輔祭 我等皆靈を全うして曰はん、我等の重いを全うして曰はん、 (詠) 主憐めよ
輔祭 主全能者、吾が列祖の神や、爾に禱る聆き納れて憐めよ、 (詠) 主憐めよ
輔祭 神や爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、 (詠) 主憐めよ (3次)
輔祭 我が国の天皇及び国を司るものの為に主に禱らん、
輔祭 又教会を司る我等の主教 () 及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、
輔祭 又恒に記憶せらるる福たるこの聖堂の建立者、及び已に寐りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方
とに葬られたる正教の者の為に禱る、
輔祭 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の為に禱る、
輔祭 又此の至尊なる聖堂に者を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にし
て豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、
司祭 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世に、
(詠) 「アミン」

しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅ わ せんぞ かみ なんじ あが ほ
誦經 主よ、我等を守り、罪なくして此の晩を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃
められ、爾の名は世に尊み歌はる、「アミン」。

しゅ なんじ たの よ なんじ あわれみ われら た たま しゅ なんじ あが ほ なんじ
主よ、爾を恃むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の
いましめ われ おし たま しゅさい なんじ あが ほ なんじ いましめ われ さと たま せい もの
誠を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に悟らせ給へ。聖なる者
よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照し給へ。

しゅ なんじ あわれみ よ よ あ なんじ て つく もの す なか ほまれ なんじ き うた なんじ
主よ、爾の憐は世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に歸し、歌は爾
に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

【増連禱】

輔祭 我等主の前に吾が晩の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ
輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が霊体の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、
輔祭 我等の霊に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、
輔祭 我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、
輔祭 我等の生命の終が「ハリストティアニン」に適ひ、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜はんことを求む、
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主爾に

司祭 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神^oに献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」
司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神^oにも
輔祭 我等の首を主に屈めん、 (詠) 主爾に
司祭 願くは爾父と子と聖神^oの国の権柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

【挿句の讚頌】 4章を歌ふ。第2調。 『三歌齋經』 P1144

ハリストスよ、アリマフェイは ^{なんじばんゆう いのち もの ししや き おろ もつやく むの} 爾 萬有の生命たる者を死者として木より下し、没葉と布と
^{もつ なんじ つつ あい すす こころ くち もつ なんじ く たい せつぶん また おそれ} を以て 爾 を裹み、愛に懲められて、心と口とを以て 爾 の朽ちざる體に接吻せしが、亦畏懼
^{ささ} に支へられて、 ^{よろこ なんじ よ} 喜びて 爾 に籲べり、 ^{ひと あい しゅ こうえい なんじ かんよう き} 人を愛する主よ、光榮は 爾 の寛容に歸す。

句 ^{しゅ おう かれ いげん き} 主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

^{しゅう しょくざいしゅ なんじ しゅう ため あらた はか お とき はずか じごく なんじ み} 衆の贖罪主よ、爾が衆の爲に新なる墓に置かれし時、辱しめられたる地獄は 爾 を見て
^{おそ はしら くじ もん やぶ ひつぎ ひら ししや お そのとき かんしゃ こころ} 懼れ、柱は折かれ、門は破られ、柩は啓かれ、死者は起きたり、其時アダムは感謝の心を
^{いだ よろこ なんじ よ} 懐き、喜びて 爾 に籲べり、 ^{ひと あい しゅ こうえい なんじ かんよう き} 人を愛する主よ、光榮は 爾 の寛容に歸す。

句 ^{ゆえ せかい けんご うご} 故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、 ^{なんじ かみ せい かたど がた かぎ がた せん にくたい もつ あま はか と} 爾 は神の性に形り難く限り難きを存して、肉體を以て甘んじて墓に閉ぢら

れし時、死の庫を閉ぢ、地獄の國を悉く空しくせり、其時爾は此の「スボタ」にも神聖の
祝福と光榮と光明とを被らせ給へり。

句 主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん。

ハリストスよ、天軍は爾が不法者より惑はす者と誣ひられ、爾の朽ちざる脅を刺したる手
にて墓の石の封ぜられしを見て、爾の言ひ難き寛忍に驚き畏れしが、亦我等の救の爲に
喜びて爾に籲べり、人を愛する主よ、光榮は爾の寛容に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン、（第5調）

イオシフはニコディムと偕に爾光を衣の若く衣る者を木より下して、爾が死し裸にし葬られざるを見
て、善心に痛く歎きて、泣きて曰へり、嗚呼哀しい哉至愛なるイススよ、日は爾が十字架に懸れる
を見て、忽黑暗に覆はれ、地は畏懼に因りて震ひ、殿の幔は裂けたり。然れども視よ、我今爾が我が
爲に甘じて死を受けしを見る。吾が神よ、我何如に爾を葬り、或は何如なる布を以て爾を裹まん。洪
恩なる者よ、我何如なる手を以て爾の朽ちざる身に觸れん、或は何如なる歌を以て爾の逝世を歌はん。
我爾の苦を崇め讃め、爾の歛瘞と復活とを讃め歌ひて籲ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。（此の讃頌を歌ふ時、
輔祭は蠟燭を持ち、司祭は香爐を執りて、寶座に置かれたる主の就寢聖像の前に爐儀を行ひて、三次之を匝る。）



日は爾が十字架に懸かれるを見て 忽ち黑暗に覆われ、
 地は畏懼に因りて 震い、 殿の幕は裂けたり。
 然れども 視よ、 我今爾が 我がために、
 甘んじて 死を受けしを見る。 我が神よ、 我いかに
 爾を葬むり、 或いは いかなる布を以て 爾をつつまん。
 洪恩なる者よ、 我いかなる手を 以て 爾の朽ちざる身に
 触れ - ん 或いは いかなる歌を以て 爾の逝世を うたわん。
 我爾の苦しみを 崇め讃め、 爾の葬りと復活とを讃め
 歌いて 呼ぶ、 主よ、 光栄は なんじに 帰す。

右の讃歌を歌ふ時、司祭は寶座に置かれたる主の就寝聖像の前に爐儀を行ひて、三次 之を回る。

誦經 主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾
 の救を見たり、爾が萬民の前に備へし者なり、是れ異邦人を照す光、及び爾の民イズラ
 イリの榮なり。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

しせいさんしゃ われら あわれ しゆ われら つみ いさぎよ しゆさい われら あやまち ゆる せい
至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖な
る者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

しゆあわれ
主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

てん いま われら ちち ねが なんじ な せい なんじ くに きた なんじ むね てん おこな
天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行は
るが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等
ゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なお われら きょうあく すく たま
免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。

(詠) 「アミン」【トロバリ】2調

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下ろし、浄き布に包み、香料にて覆い、新たなる墓に蔵めたり。

尊 --- と --- き --- イ --- オ ---
--- シフは --- なんじのいさ --- ぎよき --- 身 --- を ---
木 --- よ --- り --- 降ろ --- し --- きよ --- きぬ --- の --- に ---
つつ --- み --- 香 --- 料 --- に --- て --- おお --- い --- あら --- た ---
な --- る --- は --- か --- に --- お --- さ --- め --- た --- り

司祭 睿智

(詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」神よ、我が国の天皇と、正教会の教えと、正教のすべてのハリスティアニンを、永くまもり給へ。

司祭 至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ、

(詠) ヘルウィムより尊く、セラフィムに並なく栄え、貞操を壊らずして神言を生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

司祭 ハリストス神我等の^{たのみ}特よ、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す。

(詠) 光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、「アミン」主憐めよ (三次)。福を降せ。

司祭 [發放詞]

我等人々のため、及び我等の救いのために畏るべき苦しみと生命を施す十字架と自由のほうむりとを身に受けたまいしハリストス我等の真の神は、其至浄なる母、()、光荣にして讃美たる聖使徒聖()、聖にして義なる神の祖父母イオアキムとアンナ及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

(詠) [萬寿詞]

「アミン」神よ、我が国の天皇、及び国を司る者、我等の(府)主教()及び悉くの正教のハリスティアニン等を幾歳にも護り給へ。